

夏休みの終わりに手元に残るノートを作ろう！

桔梗祭が終わり、3年生は、来年1月の共通テストまで26週間、10月の各種推薦入試まで13週間となりました。

1週間というのは、月曜日には長い気がします、金曜日を迎えるころにはあっという間に終わってしまったと感じる時間です。特に、計画を立てる癖のない人は、何ができて、何ができなかったのかを確認する間もなく次の1週間が始まります。まずはやるべきことを書き出し、日ごとに割り当ててみるのが大切です。できない人は、友達や先生の力を借りましょう。アドバイスをもらいながら数回計画立てをしてみるとコツがわかります。

さて、今日まで3週間、教育実習にきていた佐橋さん(国語)が受験に関する体験談を話してくれましたが、私が心に残ったのは、佐橋さんが受験本番まで書きためたという宝物のようなノートの話です。彼女は問題を解いたり、模試を受けたりするたびに自分ができなかった問題についてノートにまとめていたそうです。その際には、間違えた問題を書き写すというより、どんな知識や考え方が身につけば正解できたのかについてひたすらノートに書きだしたそうです。

このようなノートを作り始めたきっかけは、模試や入試前日の自分の勉強方法がとても非効率的だと気づいた時からだそうです。既にわかっていることを一から見直したり、入試前日にも関わらず過去問を解いて不必要に不安に駆られてしまったり。しかし、このノートを作ってから、テスト前日はこのノートだけを見ると決め、それ以外のことはしませんでした。結果、第一志望の大学の入試でノートに書いたことの多くが出題され高得点を得ることができたそうです。

これはヤマが当たったラッキーな話でしょうか？決してそうではありません。人は意識していないと難しくてわからないものは後回しにして時間をかけようとせず、既に分かっていることを眺めて勉強した気になっていることがよくあります。また、模試で点数や順位ができることばかりを気にしてしまう人もいますが、模試はあくまで途中経過です。皆さんのノートに書き込むことを見つける道具だと考えれば、気持ちが和らぎませんか？ルーズリーフを使って、五教科を1つのファイルに綴じていくのも手です。あなた自身が編集した、あなただけの弱点克服ノートを、ぜひ、夏休み明けに見せてください。楽しみにしています。(文責：桑原)

♪3年の窓♪

勉強するなら正に今だ

最初にお断りしておく。当フレーズは、某予備校H氏の出現より以前、40年以上前から口癖にしている。最大の武器たる若さを持合せの君たちを念頭に綴ることとする。18歳の春までの知的努力は一生の財産と成り得る。学生を新規に採る企業側は、大学で学んだ事ではなく、出身大学名を概ね決め手とする。この公然の秘密は残念ながらあながちの外れではない。今一度強調しておこう。好むと好まざるにと拘わらず、この日本では先の努力が決定的にモノを言うこととなる。だから、大学中退も立派な学歴に成り得る。最たるは公務員試験に統合される以前の外交官試験であろう。受験資格が1年早いそれを3年次で合格し、東大法学部中退という誉れ高い飛び級資格を手にする。この中退は、東大法科に合格し、かつ、更に難関たる試験に他より早く合格したことを言外に匂わす。

本を通じて知り得た米国の事情を紹介することとする。日々課せられる宿題が日本とは大きく異なり、学年を追う毎にその負荷が増していく。高校より大学の学部、学部より大学院という具合である。付加価値が高まる分は、実社会に出てから相応の高収入が得られるゆえ、正当な評価を受けることとなる。それに比し、大学院も含め日本の大学は残念ながらそうなっていない。西澤潤一(故人、光ファイバ一部門でノーベル賞級)氏は東北大学総長在任当時、昨今の学部は空洞化し大学院はかつての学部レベルに成り下がったと語り、野依良治(2001年ノーベル化学賞)氏は受賞当時、米国と日本の大学院を横綱と十両ほどの差があると角界(典型的なヒエラルキー世界)の階級で比喻していた。

ところで、高校時分、戦前の旧制高校に憧れていた私は、岐阜にそれがなかったことを知り愕然とした。愛知には第八高等学校(現名大の一部)、石川には四高(金沢大)、長野には松本高(信大)、滋賀には彦根高商(滋賀大)…。当時、偏狭だった私は文学部と理学部しか認めなかった。実学たる経済学部、医学部、工学部などにはやや嫌悪感を抱いたものである。今なお高等教育たる大学には、旧制高校やそれに続く旧帝大がそうであったように、人格陶冶の場であって欲しいと願っている。だが、大学は就職斡旋所ではないと抗いたくもなる一方で、衣食足りて礼節を知るという先達の経験知は確かに重い。先の実学志向の学部に対しても、歳を重ねることで、今や極めて寛大な立場を採っており、目指す生徒には最大限の支援をして行きたいと思っている。将来の自分が真に大切なら、正に今、自身に対し良質な知的負荷(受験勉強は最たるもの)を掛けられよ。(文責：茂角)

『2年の窓』

東大生になる共通点とは

東京大学でも京都大学でもどこでもいいのですが例として東京大学にします。「東大生の共通点は？」何だと思いませんか。勉強ができる。など色々考えられますが一番の共通点は、東京大学に入ろうと思ったから。どんなに賢くても東京大学に入ろうと思わなければ東大生にはなれません。希望した人だけが東大生になれるのです。私の妻の母校は多治見高校と同じような進学校です。1年の時に隣にいた同じような成績の同級生が急に「僕は東大に行く」と宣言をして、それから「東大に行く」と言い続け、それに伴う努力の結果1年浪人をしましたが東大生になりました。

彼の努力は私にはわかりませんが、まず第1に東大生になる条件はそれになりたいと希望することです。

次に努力をすることは当然としてもう一つ東大生の共通点があります。「所さんの目が点」という番組で東大生の勉強法を特集していました。

東大生と普通の大学生で、ノートを取り方にはどんな違いがあるのでしょうか？

偏差値40～60程度の大学に通う、平均的な学力の学生さんと東大生に同じ授業を5分受けてもらい、高校時代と同じようにノートを取ってもらいます。すると平均的な学生は先生の板書が始まると同時に、ようやくノートを取り始めほぼ板書そのまま書き写し、記入数は先生が板書した60字程度とほぼ変わりませんでした。では現役東大生では授業が始まった途端、すぐにノートを取り始め、手を止めることなく、ひたすらペンを走らせ続け、ノートを見ると、板書と共に先生の話の細かくメモしてあり、文字数はなんと130文字！先生の板書の倍以上もノートに取っていたのです！

これは「無駄と思える事でもたくさん書いた方が、思い出す情報が増え、それがきっかけとなり、重要なキーワードを関連付けて思い出しやすくなると考えられる」そうです。つまり、たくさん書くことで、記憶を引き出すきっかけが増えます。これこそが東大生流ノートの秘密だったのです！自分に合った問題に反応できる勉強法を見つけることが大切です。

(文責 川嶋)

『1年の窓』

選択の力

昨年度末に「プレバト」を見ていて興味深い一句に出会いました。嘶家の春風亭昇吉さんの作品で、「三月の空に託せるものがない」という句です。お題は「卒業式」で、将来の夢に胸膨らます期待感を詠った詠み手が多かった中で、この句は自身の経験からその逆の心情を詠んだものとして選者も高く評価していました。

確かに、18歳で自分の人生の重要な決定をすることは大変困難なことです。卒業生全員が納得した進路に希望をもって進むわけではないし、変動の時代に途中で進路変更する人も少なくありません。中には自らの進路にネガティブなイメージを持つ人もいます。だから、この句に共感し惹きつけられる人は多いと思います。

しかしそうは言っても、若者がこの境地に安住し進路決定を先延ばしにしてしまうのは問題があります。進路選択をすることは、自己の可能性を広げ未来を拓くために重要であるだけでなく、アイデンティティを確立する上で不可欠な行為だからです。

ニューヨークのコロンビア大学ビジネススクールの全盲の学者シーナ=アイエンガー教授は「選択」について、「我々は自分を知っているから選べるのではなく、選択を通して自分を知るのだ」と説いています。我々は趣味・性格・関心・能力等をもとに進路選択をしようと思っていますが、実はその逆で、その行為を通じて我々は試行錯誤しながら自分自身を理解するようになる。だから、選択を先延ばししたり周囲に追従したりすることはアイデンティティの確立の妨げとなるというのです。

ここで大切なのは「試行錯誤」です。最初から自分の適性がわかっている人は稀です。自分の進路について仮説を立てて「試してみる」。じっくりこなければ修正を繰り返す。こうした試行錯誤を通じて自分の傾向や関心領域が見えてくるのです。

これから、高校生活初めての長期休業に入ります。課題やテストに追われるルーティンな日常で自分と向き合う機会が少ない中、じっくりと進路について考え試す貴重な機会です。また、入学以来もしかしたら萎んでしまっていた自分の夢について今一度見つめ直しより大きな希望を思い描く絶好のチャンスでもあります。

ちょうど「総合的な探究の時間」では、この休業中に新書を一冊読んで休み明けにビブリオバトルで他者に説明するという課題が出ています。読んだ本について自分の思いを発信するというのは、自分の進路選択のための試行錯誤の第一歩となります。因みに、私のおすすめの本は、新書ではありませんが、スーザン・ケイン『内向的人間のすごい力』講談社+α文庫2019です。著者は弁護士から転身したアメリカの作家で、TEDの中で私が最も惹かれた講演者の一人です。

(文責：今井)